

13

江戸時代の婚姻と「癩」

鈴木 則子

奈良女子大学生活環境学部

江戸時代、女子のために作成された結婚読本は数多あるが、男子のために書かれたものは少ないだろう。そういった希少な書の一冊が、文化5年(1808)1月に出版された『婚姻男子訓』であり、庶民階級の男子を対象に、良き伴侶を得るための秘訣集として編まれた。本報告では、本書の中に登場する「癩」の家筋と婚姻差別に関する記述についてとりあげる。

著者である津田正生(義宗、六合亭、六合庵)は、安永5年(1776)4月に尾張国海東郡佐織村に生まれた地誌家である。漢学・国学を学び、嘉永5年(1852)10月、76才で亡くなるまでに、『尾張地名考』など多くの書を著した。

『婚姻男子訓』は、初版から38年後の弘化3年(1846)4月に『良姻心得』と改題して再版されている。二巻二冊、全十二章の本文は初版の時と同じだが、男子の結婚読本は思ったほど売れなかったのか、男女両方を読者に想定したタイトルに書き換えての再版であった。だが本文を書き換えていないので、当然内容は嫁取りに関するアドバイスに終始する。

「癩」に関する記述がある章は、上巻の「縁談大意」と「血脈之解」である。「縁談大意」は結婚とはどうあるべきかについて記した章で、そのなかに『大載礼』から「五不取」という、嫁取りを避けるべき5つの家をあげている。すなわち「逆家」(「不忠・不孝」の道に栄える家)・「乱家」(「淫乱不義に身を乱したる家)・「罪人の家」・「悪疾に縁をひく家」・父親のいない家の長女である。この内、「悪疾」は「癩病・癩癩・瘡毒等」をさす。これらの病が一般的には「縁をひく」、いわゆる家筋とみなされて差別されていたことがうかがえる。

「血脈之解」の章では、「癩」の家筋観に基づく婚姻忌避を批判する。「学医」の言葉として、「癩」を「血脈相承」するという理由で嫌うのは批判されるべきことであること、世間で「癩」の家筋とされる家も、実際は親戚も含めて患者がいるわけでない場合も多く、代々本当に「悪疾」の患者が出ている家でなければ避ける必要はない、と記す。また、このような差別は「士大夫歴々の家」にはなく、むしろ「農商」の庶民が気にしてせつかくの良縁を逃している、「癩」の婚姻差別は病気の原因を知らないから起きるのだと述べ、「蒙昧の人はこの理をしらず、故に医書を証して病源を明らかにするのみ」と、古今東西の医学書を引用して病因を説明する。中国医書では『黄帝内経』・『傷寒論』・『外科正宗』・『癩瘍機要』・『千金方』、そして朱丹溪の書を引用する。最後には、やはり「学医」の言葉として、「癩」は初めはみな「外邪」によって「気血凝滞」して発病する、したがって「貴人」でも突然発病することもある、とまとめている。

医学的に正しい知識があれば「癩」に対する差別を防ぐことができるはずである、という津田の発想は、この時代の知識人層が達成した科学的・合理的思考のひとつの到達点であろう。

いたずらに因習になずむことへの批判的姿勢は、他の事柄においても貫かれている。たとえば「男女相性之解並丙午庚申之事」では、男女の相性を考えるのに五行説や易にこだわりすぎることを、丙午生まれの女性を忌避することを俗説として斥けているが、それらの根拠もまた、五行説を人間に適用して考えることの限界性を学問的に説くことで示されている。

ただし、本書が「五不取」を紹介していることが示すように、津田の家筋差別への批判や合理的的精神も、一定の矛盾や限界性を持つものであり、彼の思想の全体像については今後さらに詳細な分析が必要である。